

ロータス九州(株)が全メーカーを対象に車両診断情報を一元管理する全国初の試みを発表

～10月の商用化に向けて、7月末よりロータス九州全店でトライアルを開始～
顧客の診断履歴をグループ内で共有、履歴に基づいた適切なサービス提供へ

日本最大の整備事業者組織が故障診断ツールを用いて収集した車両情報を一元管理し、そのデータを組織内全体で有効活用していこうという計画が、このほど大分市で発表された。

日本最大の独立系整備事業者組織、全日本ロータス同友会(1600社)／(株)ロータス(松尾孝会長、以下ロータス)の九州／沖縄地域における同友174社で構成するロータス九州(株)(桑原貞造、以下ロータス九州)は、7月末より2カ月間、九州ブロックのロータス店全店において、故障診断ツールの本格的な商用化に向けての一斉トライアルを行うと発表した。

同計画は7月4日、大分市内のホテルで行われたロータス九州ブロック大会において正式に発表されたもので、トライアル期間中に1万台以上の車両診断を行っていく計画。

ロータス九州は、かねてより所属する車両電子情報有効活用研究会(大塚健治会長)の車載・診断機ワーキンググループのメンバーとともに、OBD IIプロジェクトを立ち上げ、携帯電話網を活用した自動車の故障診断ツールの共同開発を進めていた。



ロータス九州(株)の桑原貞造社長、(株)来島自動車の来島修自社長による「OBD II発表会」

この故障診断ツールは、携帯電話網を利用することにより、スキャンしたデータをセンターサーバーで一元管理することが出来る。九州・沖縄地区のロータス店はどこでも顧客の診断履歴を共有し、その履歴に基づいた適切なサービスを提供することも可能となる。

またデータの解析をセンターサーバーで一元的に行うことにより、常に最新のデータに基づいた故障診断が実施出来るので、顧客により安心なカーライフを提案出来るようになる。

従来の汎用故障診断機では、それぞれの機器が独立したシステムだったため、新しい車のデータに対応するには機器それぞれでデータ更新を行う必要があり、かつその診断履歴も共有することが出来なかった。

今年10月以降の新型車に搭載が義務化される、より高度な車載式故障診断装置(OBD II)に対応したツールを、ロータス九州のロータス店全店がいち早く導入するとともに、顧客がどのロータス店でも適切で安全なサービスを受けられる体制を早期に構築することを目指し、本格商用に先立ちトライア



会場内では実車を持ち込んでOBD II故障診断機のデモも行われた

ル開始に至った。

今年5月より20社でプレトライアル行い、すでに1000台以上のテスト診断を実施。6月30日現在、対象となる744車種中(型式)325車種をカバーしたとしている。

ロータス九州のロータス店全店で実施する一斉トライアルでは、期間中1万台以上の車両診断を実施することを目標としており、今秋にも本格的な商用を開始していく計画。

自動車メーカー各社が持つ車両情報は、トヨタ自動車のG-BOOKに代表されるように系列ディーラーでの情報収集にとどまるが、今回のように全メーカーを対象に車両診断情報を一元管理するのは、同組織が全国初の試みとなる。

近年生産される自動車はブラックボックス化し、自動車メーカー系列でなければ手を出せない環境にあるとされる。同組織の試みはこうした自動車情報戦線に大きな一石を投じるものであり、同時に整備事業者に大きな可能性を提示するものとして注目される。



ロータス九州で扱うモバイルスキャンツールのトライアル端末イメージ